

JAAGA 横田基地研修(2018・10・3)

JAAGA members visit to Yokota Air Base on Oct. 3rd

10月3日、JAAGA 会員による横田基地研修が行われました。研修団は、福江広明 正会員を団長とし、高橋雅之 法人賛助会員（(株)シー・キューブド・アイ・システムズ）を副団長として、正会員8名、個人賛助会員8名、法人賛助会員14名及び同行理事5名の合計35名となりました。当日は、台風接近による悪天予想もありましたが、秋の穏やかな晴れ日となり、絶好の研修日和となりました。結団式において、福江団長からは、米軍の研修を通じて、米軍に関して、より深く理解して欲しいということと、とにかく楽しんで欲しいとの思いが伝えられました。

まず研修団は、第5空軍司令部を訪問し、福江団長、高橋副団長、小野理事及び池田理事が在日米軍司令官兼第5空軍司令官マルティネス中将（Lt. Gen. Jerry P. Martinez）を表敬訪問しました。マルティネス司令官は、訪問した4名を大歓迎し、お茶会で持て成していただきました。福江団長から、JAAGA 研修団の受入れに対する謝意が述べられると司令官からは、JAAGA に対する敬意と深い親しみの意が伝えられ、終始和やかな雰囲気の中でお互いの親睦が図られ、最後には司令官から充実した研修になることを祈るとのお言葉をいただきました。その後、第5空軍会議室に研修団全員が入り、「第5空軍の任務の概要」をブリーフィングしていただきました。ブリーフィングに先立って司令官から「皆様、よく来ていただきました。JAAGA については、歴代司令官等からしっかり付き合うように厳命されてもいますし、JAAGA の日米交流における評判はとても良いので、是非色々見ながら質問して、日米の状況を理解してってください。」とのスピーチを頂きました。ブリーフィングは、日本語で行われたことと、資料が分かりやすく図解され、写真も多用されていたので、研修団各員は、第5空軍の任務が良く理解できました。笹尾昭 正会員からは、韓半島からの邦人救出に関する質問が、市野耕人 正会員からは、先の米朝首脳会談時における米軍の態勢等に関する質問が出ましたが、いずれの質問にも第5空軍副司令官ドージャー准将（Brig. Gen. Todd A Dozier）から丁寧な回答を頂き、また、福江団長からの補足説明もあって、第5空軍が諸々の対処に常に磐石な態勢にあることが理解できました。

続いて、第374空輸航空団研修に移行し、C-130J の研修を実施しました。C-130J は、C-130H の改良型で、よりパワフルに、より積載量が多く、より高高度を飛ぶことができるようになり、横田基地の C-130H と今年の3月から逐次入れ替えてきたとの説明を受けました。また、印象に残ったのは、例年、クリスマスには、「Christmas Drop」という人道支援任務があり、南海の島国に缶詰やTシャツやぬいぐるみなどが入った箱を空中から大量に投下するとのことでした。通算67回目となった去年は、ミクロネシア諸島上空において、25tもの物資を投下したそうです。この時は、航空自衛隊のC-130Hもオーストラリア軍とともに参加して、共同で作戦を実施しています。また、研修者から沢山の質問

があって、ブリーファの大尉が大汗をかく場面もありましたが、米国本土から横田に機体を持ってくるのに、1日12時間飛んでも5日間を要することや、当該機には電子レンジが積んであって、空中での食事情はとても快適であること等、様々な運用が分かって有意義でした。

JAAGA主催の会食・懇談は、日米主要幹部26名を招待して実施されました。まず、主催者側の代表として、福江団長から本研修の受入れに対しての謝辞が述べられ、JAAGAは、これからも日米両空軍が効果的に事態対処できるように全面支援していくことを誓い、「まさかの時の友は真の友」という共通認識を持つべきことを強調してスピーチを結びました。

マルチネス司令官及び航空総隊司令官武藤茂樹空将からは、本研修に対する歓迎の言葉とJAAGAへの敬意及び日頃の諸活動に対する謝辞が述べられました。会食間は、生演奏が流れていて、和やかな雰囲気の中で明るく懇談が行われ、横田基地の航空自衛隊と米空軍の関係が良好であることを研修団員は感じ取りました。締めくくりに、ドージャー第5空軍副司令官がスピーチを実施し、会食・懇談に対する謝辞と日米両空軍の連携には欠かせないとして、JAAGAの諸支援への感謝の意が述べられました。研修に関しては、よく質問をして深く理解し、見たもの全てが日米にとって大切であるということを周りの人に伝えて欲しい旨の要望がなされました。

会食後、短い時間ではありましたが、福江団長、高橋副団長及び第374空輸航空団司令ジョーンズ大佐 (Col. Otis C. Jones) の3名が、将校クラブの個室において懇談され、「Christmas Drop」作戦の持つ役割（人道支援及び抑止力等）やインド・太平洋地域の安定等に関して意見交換を行ないました。

午後の研修は、まずCV-22オスプレイの研修から始まりました。大きな格納庫の中央に駐機されている機体について、解説してもらいながら、機外から機内へと見学して行きました。皆、まずは全長約17m、全幅約26mというオスプレイの大きさに圧倒され、片方のエンジンが不調でもホバリングが実施可能であるということに大変驚きましたが、操縦士からの豊富な飛行経験が必要であるという説明に、繊細で難しい飛行機だという印象を受けました。

航空総隊司令部研修においては、日本周辺の現状、航空総隊の任務、周辺国の動向、日米共同訓練、本年度事業（体制移行、AOC整備）等についてブリーフィングがあり、活発な質疑応答が行われました。司令部施設研修においては、日米調整所における実際の日米調整ミーティングの場面を見ることができ、綿密な調整が図られていると認識しました。

航空総隊司令官講話においては、日米同盟を更に強化するために、新ガイドラインに基づいて、①有事以外の事項（情報収集、警戒監視、大規模災害対処等）も含めて、シームレスに協力していくこと、②グローバルな地域での協力及びサイバー・宇宙分野での協力をしていくことを、分かりやすく説明していただきました。

研修団各員は、本研修を通じて、日本周辺の安全保障環境がどのように変化しても、航

空自衛隊と米空軍は、強い絆を持って対処力及び抑止力を強め、日米同盟を堅持していくとの認識を強くし、会食・懇談や様々な場面を通して、日米友好親善を図ることができたので、本研修目的は達成されたものと思います。ご支援いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。(池田五十二 記)

